れんごう中越地協

第758号2012.8.11
連合中越地域協議会
長岡市東蔵王2-2-68
TEL 0258-24-0515
FAX 0258-24-8930
発行人　矢島　良彦
定　価　１部１０円
購読料は会費に含む

祈りの夏、平和を願って語り継ぐ

非核平和都市宣言市民の集い・平和フォーラム・平和の森コンサート

１４８２人が犠牲となった昭和20年８月１日の長岡空襲から67年を経た８月１日(水)午前８時に平和の森公園で市民など５００名以上が参加して、長岡市非核平和都市宣言市民の集いが開かれた。

長岡市非核平和都市宣言市民の集いは市内の寺院が一斉に鐘を打つ午前８時に全員の黙とうで開会した。

昭和59年県内で初めて制定された「非核平和都市宣言」が平和のための長岡行動実行委員会の小柳委員長から朗読され、平和を象徴する鳩が放たれた。

続いて、主催者の森長岡市長からは、67年前の今日、学童２８４名を含む１４８２名の尊い命と１万２千戸が被災した。本年３月にハワイ・ホノルル市と姉妹都市を締結したが、平和に向けてさらに努力を続け、記憶を後世に一人一人が語り継ぐことが、世界平和につながる等の挨拶が述べられた。次に、田村新教組執行委員長から亡くなった子供たちの慰霊と平和を願って作られた平和像の由来について話された。

献花に続いて長岡空襲当時15歳の市内に住む中村さんが次のような体験を語った。体験では、当時は学徒動員で特攻隊の計器を磨く仕事で勉強などできる状況になかった。左近に原子力爆弾の模擬爆弾が投下された。空襲当日は女学校寄宿舎で共同生活中に警報のサイレンで目を開けると真っ赤だった。グラウンドにも焼夷弾が落ち、大手通方向も真っ赤に燃えていた。防空頭巾を持って必死に炎から逃げ、今朝白の踏切を渡り福島江にも飛び込んだ。栖吉川の土手で伏せているときには、線香花火のように焼夷弾が落ちる様や青田が火の海となって気を失いかけたが、明け方栖吉小学校にたどり着いた。女学校に戻ると校舎も寄宿舎も跡形もなく焼けていた。リュックを背負い小国から自転車で探しにきた父が私を見つけるなり「生きていたか！」と言った、父の大粒の温かい涙を忘れない。父が持ってきた母のおにぎり１個ときゅうり１本を泣きながら食べた。防空頭巾は母が着物をほぐして作ってくれたものでボロボロとなった。私には17人の孫がいる。孫が一つの命の重みについて書いた作文の中に「ばあちゃんが死んでたら僕はここにいなかった。戦争を生き抜いてくれてありがとう」とあった。１４８２名の尊い命はどういう重みだろうか。どんなに生きたかっただろう。空襲体験を話したくない人もいるだろうが、若い人にはその体験を聞いて、語り継いでほしいと結ばれた。

ながおか平和フォーラム

講演会 生徒による劇

ながおか平和フォーラムが８月１日(水)午後１時30分からアオーレ長岡で開かれ８００名を超える市民が参加した。

第１部は、講演「あの日を生きのびた私は-東京大空襲-と朗読「戦場」(花森安治著)を日色ともゑ氏が語った。祖母・叔母を空襲でなくし、そのことを語らないもう一人の叔母の手紙や母から聞いた話を語り、戦争の悲惨さを伝える詩が朗読された。第２部では、広島派遣中学生の決意表明や広島招待中学生の言葉が述べられた。続いて、長岡市立南中学校生徒による平和劇「平和の心を未来へ、８月１日を忘れない」のダイジェストＤＶＤ上映と「誓い」という創作曲が合唱された。

第18回平和の森コンサート

祈りと絆が心に響く

第18回平和の森コンサートが、７月31日(火)午後６時30分から平和の森公園で開かれ約１０００名が参加した。

第１部ではハワイの伝統・アロハの精神を込めたフラダンスが披露された。また、森長岡市長もウクレレで仲間入りし、長岡市から世界平和につながってほしいと述べられた。

第２部は、県内で歌う活動団体のゴスペル。歌の力と「祈りと絆」のメッセージが心に響いた。

終わりには、柿川に慰霊の灯篭が流され、空襲で犠牲となった悲しい出来事を思い、世界平和を祈るコンサートだった。

東蔵王２　≪№85≫

副議長

小川正巳

第30回ロンドンオリンピックが開幕して、８月12日で閉幕となるが、嘉納治五郎選手団長率いる日本が、第５回ストックホルム五輪に初参加して１００年となる節目の大会らしい▼この大会は、初物の多い大会であるようで、これまでイスラム教の戒律に基づき、男性しか出場させていなかったサウジアラビア、カタール、ブルネイが女性選手を派遣することになり、オリンピック史上初めてすべての国・地域から女性選手が参加できる大会となった。これも、初めてであるが２０４の国と地域が女性選手を派遣している。また今本大会はボクシングで女子種目を新たに採用し、初めて全競技で男女の種目が実施される▼日本の選手団は期待の大小はあるものの、大いに力を発揮してくれていると思う。これまでにメダルの無かった卓球女子も初のメダル。その他にも、あまり注目のないアーチェリーは静寂の中での緊張した空気感が気持ちを引き締める。男子個人で銀メダルをとった▼世界の中には、まだまだいろんな制限がありオリンピックに出られない国もあるが、スポーツの祭典は国境を越え、もっと多くの人々を繋ぐ手段として広がって欲しい。平和の架け橋となることを祈りながらオリンピックに感謝したい。残暑と睡魔、更には自身との戦い？のロンドンオリンピックであった。

サラリーマン川柳（ダイエット　ハカリの上で　鳥になり）（久々の　化粧に子ども　あとずさり）（陰口を　たたくやつほど　ゴマをすり）（恋女房　何時か知らずに　肥え女房）

平 和 宣 言

1945年8月6日8時15分、私たちの故郷は、一発の原子爆弾により灰じんに帰しました。帰る家や慣れ親しんだ暮らし、大切に守ってきた文化までもが失われてしまいました。――「広島が無くなっていた。何もかも無くなっていた。道も無い。辺り一面焼け野原。悲しいことに一目で遠くまで見える。市電の線路であろう道に焼け落ちた電線を目安に歩いた。市電の道は熱かった。人々の死があちこちにあった。」――それは、当時20歳の女性が見た街であり、被爆者の誰もが目の当たりにした広島の姿です。川辺からは、賑やかな祭り、ボート遊び、魚釣りや貝掘り、手長えびを捕る子どもたちの姿も消えてしまいました。

そして原爆は、かけがえのない人の命を簡単に破壊してしまいました。――「警防団の人と一緒にトラックで遺体の収容作業に出る。少年の私は、足首を持つように言われ、つかむが、ズルッと皮がむけて握れない。覚悟を決めて指先に力を入れると、滴が垂れた。臭い。骨が握れた。いちにのさんでトラックに積んだ。」――この当時13歳の少年の体験のように、辺り一面は、無数の屍が重なり、声にならない呻き声の中、息のない母親のお乳を吸い続ける幼児、死んだ赤子を抱き締め虚ろな顔の母親など、正に生き地獄だったのです。

当時16歳の少女は、大切な家族を次々と亡くしました。――「7歳だった弟は、被爆直後に全身火傷で亡くなり、ひと月後には、父と母、そして13歳の弟と11歳の妹が亡くなりました。唯一生き残った当時3歳の弟も、その後、癌で亡くなりました。」――広島では、幼子からお年寄りまで、その年の暮れまでに14万人もの尊い命が失われました。

深い闇に突き落とされたヒロシマ。被爆者は、そのヒロシマで原爆を身を以て体験し、後障害や偏見に苦しみながらも生き抜いてきました。そして、自らの体験を語り、怒りや憎しみを乗り越え、核兵器の非人道性を訴え、核兵器廃絶に尽力してきました。私たちは、その辛さ、悲しさ、苦しみと共に、その切なる願いを世界に伝えたいのです。

広島市はこの夏、平均年齢が78歳を超えた被爆者の体験と願いを受け継ぎ、語り伝えたいという人々の思いに応え、伝承者養成事業を開始しました。被爆の実相を風化させず、国内外のより多くの人々と核兵器廃絶に向けた思いを共有していくためです。

世界中の皆さん、とりわけ核兵器を保有する国の為政者の皆さん、被爆地で平和について考えるため、是非とも広島を訪れてください。

平和市長会議は今年、設立30周年を迎えました。2020年までの核兵器廃絶を目指す加盟都市は5,300を超え、約10億人の市民を擁する会議へと成長しています。その平和市長会議の総会を来年8月に広島で開催します。核兵器禁止条約の締結、さらには核兵器廃絶の実現を願う圧倒的多数の市民の声が発信されることになります。そして、再来年の春には、我が国を始め10の非核兵器国による「軍縮・不拡散イニシアティブ」の外相会合も開催されます。核兵器廃絶の願いや決意は、必ずや、広島を起点として全世界に広がり、世界恒久平和に結実するものと信じています。

2011年3月11日は、自然災害に原子力発電所の事故が重なる未曾有の大惨事が発生した、人類にとって忘れ難い日となりました。今も苦しい生活を強いられながらも、前向きに生きようとする被災者の皆さんの姿は、67年前のあの日を経験したヒロシマの人々と重なります。皆さん、必ず訪れる明日への希望を信じてください。私たちの心は、皆さんと共にあります。

あの忌まわしい事故を教訓とし、我が国のエネルギー政策について、「核と人類は共存できない」という訴えのほか様々な声を反映した国民的議論が進められています。日本政府は、市民の暮らしと安全を守るためのエネルギー政策を一刻も早く確立してください。また、唯一の被爆国としてヒロシマ・ナガサキと思いを共有し、さらに、私たちの住む北東アジアに不安定な情勢が見られることをしっかり認識した上で、核兵器廃絶に向けリーダーシップを一層発揮してください。そして、原爆により今なお苦しんでいる国内外の被爆者への温かい支援策を充実させるとともに、「黒い雨降雨地域」の拡大に向けた政治判断をしてください。

私たちは、今改めて、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、この広島を拠点にして、被爆者の体験と願いを世界に伝え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に全力を尽くすことを、ここに誓います。

平成24年（2012年）8月6日

広島市長　松井　一實

平 和 宣 言

人間は愚かにも戦争をくりかえしてきました。しかし、たとえ戦争であっても許されない行為があります。現在では、子どもや母親、市民、傷ついた兵士や捕虜を殺傷することは「国際人道法」で犯罪とされます。毒ガス、細菌兵器、対人地雷など人間に無差別に苦しみを与え、環境に深刻な損害を与える兵器も「非人道的兵器」として明確に禁止されています。

1945年8月9日午前11時2分、アメリカの爆撃機によって長崎に一発の原子爆弾が投下されました。人間は熱線で黒焦げになり、鉄のレールも折れ曲がるほどの爆風で体が引き裂かれました。皮膚が垂れ下がった裸の人々。頭をもがれた赤ちゃんを抱く母親。元気そうにみえた人々も次々に死んでいきました。その年のうちに約7万4千人の方が亡くなり、約7万5千人の方が負傷しました。生き残った人々も放射線の影響で年齢を重ねるにつれて、がんなどの発病率が高くなり、被爆者の不安は今も消えることはありません。

無差別に、これほどむごく人の命を奪い、長年にわたり人を苦しめ続ける核兵器がなぜいまだに禁止されていないのでしょうか。

昨年11月、戦争の悲惨さを長く見つめてきた国際赤十字・赤新月運動が人道的な立場から「核兵器廃絶へ向かって進む」という決議を行いました。今年5月、ウィーンで開催された「核不拡散条約（ＮＰＴ）再検討会議」準備委員会では、多くの国が核兵器の非人道性に言及し、16か国が「核軍縮の人道的側面に関する共同声明」を発表しました。今ようやく、核兵器を非人道的兵器に位置付けようとする声が高まりつつあります。それはこれまで被爆地が声の限り叫び続けてきたことでもあります。

しかし、現実はどうでしょうか。

世界には今も1万9千発の核兵器が存在しています。地球に住む私たちは数分で核戦争が始まるかもしれない危険性の中で生きています。広島、長崎に落とされた原子爆弾よりもはるかに凄まじい破壊力を持つ核兵器が使われた時、人類はいったいどうなるのでしょうか。

長崎を核兵器で攻撃された最後の都市にするためには、核兵器による攻撃はもちろん、開発から配備にいたるまですべてを明確に禁止しなければなりません。「核不拡散条約（ＮＰＴ）」を越える新たな仕組みが求められています。そして、すでに私たちはその方法を見いだしています。

その一つが「核兵器禁止条約（ＮＷＣ）」です。2008年には国連の潘基文事務総長がその必要性を訴え、2010年の「核不拡散条約（ＮＰＴ）再検討会議」の最終文書でも初めて言及されました。今こそ、国際社会はその締結に向けて具体的な一歩を踏み出すべきです。

「非核兵器地帯」の取り組みも現実的で具体的な方法です。すでに南半球の陸地のほとんどは非核兵器地帯になっています。今年は中東非核兵器地帯の創設に向けた会議開催の努力が続けられています。私たちはこれまでも「北東アジア非核兵器地帯」への取り組みをいくどとなく日本政府に求めてきました。政府は非核三原則の法制化とともにこうした取り組みを推進して、北朝鮮の核兵器をめぐる深刻な事態の打開に挑み、被爆国としてのリーダーシップを発揮すべきです。

今年4月、長崎大学に念願の「核兵器廃絶研究センター（ＲＥＣＮＡ）」が開設されました。「核兵器のない世界」を実現するための情報や提案を発信し、ネットワークを広げる拠点となる組織です。「ＲＥＣＮＡ」の設立を機に、私たちはより一層力強く被爆地の使命を果たしていく決意です。

核兵器のない世界を実現するためには、次世代への働きかけが重要です。明日から日本政府と国連大学が共催して「軍縮・不拡散教育グローバル・フォーラム」がここ長崎で始まります。

核兵器は他国への不信感と恐怖、そして力による支配という考えから生まれました。次の世代がそれとは逆に相互の信頼と安心感、そして共生という考えに基づいて社会をつくり動かすことができるように、長崎は平和教育と国際理解教育にも力を注いでいきます。

東京電力福島第一原子力発電所の事故は世界を震撼させました。福島で放射能の不安に脅える日々が今も続いていることに私たちは心を痛めています。長崎市民はこれからも福島に寄り添い、応援し続けます。日本政府は被災地の復興を急ぐとともに、放射能に脅かされることのない社会を再構築するための新しいエネルギー政策の目標と、そこに至る明確な具体策を示してください。原子力発電所が稼働するなかで貯め込んだ膨大な量の高レベル放射性廃棄物の処分も先送りできない課題です。国際社会はその解決に協力して取り組むべきです。被爆者の平均年齢は77歳を超えました。政府は、今一度、被爆により苦しんでいる方たちの声に真摯に耳を傾け、援護政策のさらなる充実に努力してください。

原子爆弾により命を奪われた方々に哀悼の意を表するとともに、今後とも広島市、そして同じ思いを持つ世界の人たちと協力して核兵器廃絶に取り組んでいくことをここに宣言します。

2012年（平成24年）8月9日

長崎市長　田上　富久